

---

# オーバーエイジ・ブレイブヒーロー

嶋本圭太郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オーバーエイジ・ブレイブヒーロー

### 【Nコード】

N7088X

### 【作者名】

嶋本圭太郎

### 【あらすじ】

早乙女智浩が気づいたとき、あたりは見たことのない景色に生まれ、そして見たことのない生き物がいた。

見知らぬ異世界、謎の少女、そして与えられた強大な力。どこにでもある、陳腐な物語？

だが、智浩はそんなものは知りはない。何故なら……。

(1)

早乙女智浩は、いま、必死に走っている。

決して運動会の最中でもなければ、陸上の選手というわけでもない。むしろ、智浩は運動とは縁遠い生活を長く続けていた。

智浩は、追われていた。

理由などわからない。相手は智浩を視界に入れるなり、その牙を剥き出しにしてこちらを追いかけたのだ。

「いったい、なんだって、いうんだ！」

理不尽さのあまり叫び、背後を確認する。

当然、そいつはまだ智浩の背後にいて、巨大なふたつの瞳をらんと輝かせてこちらへ迫ってきていた。

人間ではない。

大きく裂けた口と、そこに整然とならぶ鋭い牙。見るからに強靱な後ろ肢と、それに比べればだいぶ華奢な前肢。そして全身をおおう緑色のうろこ。

智浩の知識からすれば、それは恐竜と呼ばれるものに相違なかった。

全長三メートルほどで、恐竜なのだとすればその中ではちいさな部類だが、一七センチメートルと日本人の平均身長ほどの背丈しかない智浩とくらべれば、倍近くはあるということである。

それが、さきほどから智浩に迫ってきているのだ。

「ひいっ！」

悲鳴を上げて、また正面をむく。彼の両足はだいぶ前からしきりに限界を訴えていたが、足を止めるわけにはいかない。

これは夢か？なんだって私がこんな目に！

もはや叫ぶこともできない。すっかり顎があがってしまい、いくら息を吸っても酸素を取りこめた気がしない。

そもそも、ここはどこだ？

智浩が走っているのは車一台がやっと通れそうな狭い道で、しかもまったく舗装されておらず、両側は森が広がっている。どこかの山奥だろうか？ しかし、彼は直前まで自分の住むマンションにいたはずだった。

もう何年も旅行すらしていなかった彼には、こんな風景は記憶にすらないものだったのだ。

「うわっ！」

ついに足がもつれ、智浩はその場に突っ伏した。立ち上がるうちに、一度動くのを止めてしまった足はもう言うことを聞いてくれない。

振り向けば、恐竜がもうすぐそこまで迫ってきている。智浩がもう逃げられないと悟って走るのをやめ、一步一步ゆっくりとこちらへ迫ってきていた。

呪文を、唱えて。

「？」

唐突に頭の中に声が響き、智浩はあたりを見回した。  
だが、目の前に迫る恐竜のほかには誰の姿も見えない。

私の言葉に続いて？ e m , a v i a , q i a n ……。

透明感のある若い女性の声。はっきりとした指示の言葉に続いて、よくわからない、それこそ「呪文」というべきことばが続けられる。

見ず知らずの世界、突如おそいくる怪物、そして頭にひびく女性の声。

もしも智浩が夢と想像に満ちた子供であったなら、理解できない

までも女性の声に従っていたかもしれない。

だが残念なことに、早乙女智浩は今年四十六歳になる中年だった。

「くつ、これはなんだ、幻覚、幻聴か？」

智浩は頭を振って、自らの意識をはつきりさせようとする。

望安濃商事で勤続二十四年、経理事務のエキスパートとして紙の台帳からパソコンへの切り替わりにも対応してきた経験豊富な社会人。

しかしそうして積み上げられた経験は、えてして想定外の事態に対する柔軟性というものを、知らず知らず削り取ってしまうものなのだ。

彼の常識では、気がついたら見知らぬ森の中にいるなどということも、映画か博物館の中にしかないような恐竜におそわれることも、頭の中に直接声が響いてくるなどということも、まったくもってあり得ないことなのだった。

落ち着いて、私の言葉を聞いて？

当然、首を振ったくらいで目の前の怪物が消え去るはずもなく、女性も頭の中で智浩を呼びかけつつづけている。

「私は、どうしたんだ？ 死ぬ間際になって、おかしくなってしまうたのか？」

ちよつと、いいから呪文を！ 聞いてる？

そうこうしている間にも恐竜は近づいてきており、頭に響く女性の声からそころなしか焦りが感じられる。

「呪文ってなんだ！ 私は、そ、そんなもの知らないぞ！」

だから、今言ってるじゃない！ e m , a v i a , q i a n ,  
a n n u ! ほら！

女性の声も当初の落ち着いたものからはほど遠くなり、智浩を怒鳴りつけるようなものになっている。

だが、智浩はそれすらわからないほど、完全に我を失っていた。  
「くそっ、これは夢だ、夢に決まってる！」

ねえ、ほんとに言わないと、まずいんだって、ねえってば！

「目を閉じろ、そうすれば、すぐにこんな夢」  
眼前に迫る恐竜の迫力に、歯を震わせながら智浩は目を閉じる。

ちよつと、だめ！ そんなことしないで、呪文を唱えて！

頭に響く声も大慌てだ。

「そして目を開ければ、元のマンションに」  
智浩が目を開く。

だがやはり、そこは先ほどまで自分がいたはずの見慣れたマンションの一室などではなく、森に囲まれた道の途上。

そして、眼前にはばっくりと開かれた恐竜の顎が、今まさに智浩の頭部にかぶりつこうとしていた。

「うわーっ！」

きゃーっ！

智浩だけでなく、頭の中の声まで叫んだ。  
そして、智浩の視界が真っ赤に染まった。

「な、なんだ……」

智浩は呆然と、目の前の光景を眺めている。

視界が赤く染まったのは、彼の頭蓋が砕かれたからではなかった。今まさにそうせんと、口腔をいっぱいに広げて見せていた目の前の恐竜は、しかしその口を閉じることがなかった。

恐竜は、燃えていた。

比喩ではなく、文字通りその全身から炎を吹き出していたのである。それが智浩の視界を染めていたのだった。

どうしてそうなったのかなど智浩には知る由もないが、とにかく恐竜が自分の意志でそうしたのでないことは明白だった。

智浩が尻を引きずりながら恐竜の口から離れるのとはほぼ同時に、それはゆらめくようにして崩れ落ち、そのまま息絶えたのである。

恐竜は倒れた後も燃え続ける。頑丈そうに見えた緑色のうろこもあえなく焼け焦げ、全身がほぼ炭となった頃、ようやく鎮火した。

「た、助かった……」

智浩は恐竜が完全に動かなくなったのを確認すると、大きく息をついた。

そして、尻についた土を払い落しながら腰を上げる。

人生で初めてではないかと思うほどの距離を全力疾走したため、膝がわらってなかなかいうことを聞かなかったが、それでもなんとか立ち上がることに成功した。

それから、改めて辺りを見回す。

気持ちが落ち着いても、そこはやはり智浩の記憶にはない場所だった。どうやってここに来たのかも思い出せない。

今日の行動をいちから思い出してみる。今日は会社が休みだったので、起きたのは午前九時過ぎだった。それから軽い朝食をとって、そして……。

その思索を中断したのは、草を掻きわけるがさがさという音だった。

もしかして、恐竜の仲間がいたのか？

智浩の背筋が寒くなる。再び逃げ出そうにも、足は限界だ。長い距離を逃げるのは不可能だった。

音は森の中から聞こえてくる。さっきのとは別の生き物だろうか？

智浩は動くに動けず、音のする方を注視した。

やがて、現れたのは。

「あれっ、大人の人だ？」

人間だった。

若い、というよりも智浩の感覚からすると幼いといったほうがしっくり来る女性だ。

息子と同じくらいだな。

智浩には妻との間にひとり息子がいる。今年十四歳になる息子の<sup>こういち</sup>浩一の姿が頭に浮かんだ。

少女はとくに警戒する様子もなく、智浩のことを眺めまわしている。無遠慮な視線に面食らいつつも、とりあえず襲ってくる様子はないので智浩はすこし身体力を抜いた。

「でも格好からしても、確かにあっちの人だよな」

少女のほうは智浩の観察を終えると、かたわらでまだ煙を上げている恐竜の死骸を見やった。

「うわ、アールが黒こげに……まさか、呪文もなしで……」

なにやらぶつぶつ言っている少女を、今度は智浩が観察する。

少女は長い金髪を後ろでまとめており、瞳の色も黒ではなく、薄い茶色だ。染めているのでなければ、外国人だろう。だが、独り言も流ちょうな日本語をしゃべっている。両親は外国生まれだが、彼女は日本で生まれ育った。そんなところだろうか。

少女の格好は少々奇抜といえた。前合わせの白い服はところどころ赤いステッチが入っていて、上半身だけを見ると神社にいる巫女の格好のようにも見える。

だが、履いているのは袴ではなく、膝上の結構きわどいミニスカートだった。足下は素足にサンダル履きだ。



最近の中学生は、こんな格好をするのか？

ふだん街で見かける子供たちの服装はここまで突飛でもなかった  
と思い、智浩ははたして声をかけていいものか、とすこし戸惑った。  
だが、今の智浩はまさに、右も左もわからない状況である。ここ  
がどこであれ、自宅に帰らなければならぬ。どっちに向かえば街  
へ出られるかくらいは教えてもらえるだろう。

「君、すまないが……」

「あなた！ どうして人の忠告を無視したの？」

智浩の声は少女の怒声にかき消されてしまった。

「忠告？ なんの話だ」

「さっき襲われてたときの話。わたしのいうとおりにしていればあ  
んな危ない目に遭う必要なかったのに」

智浩はそう言われてはじめて、さきほど頭の中に響いていた声が  
彼女のものと同じしていることに気がついた。

「あれは、君の声だったのか？」

「そうよ」

頭の中に直接響いているように感じたが、実際には彼女が近くに  
いて叫んでいたということだろうか。

「あそこまで言うことを聞いてもらえないなんて思わなかったわ！」

智浩は少女がなんと叫んでいたか思いだそうとした。細部は思い  
出せないが、呪文がどうか言っていたように思える。

助かるように祈れ、という意味だったのだろうか？

あの状況で祈ったところで助かるとも思えなかったが、智浩は謝  
罪することにした。彼女が自分のために叫んでくれたことにはかわ  
りない。

「それはすまなかった。状況が状況だったから、さすがに動転して  
しまっていてね。それで、これも君が？」

智浩はすっかり炭化した恐竜の死骸を見やった。

ものの数分でこの有様である。よほど強力な火力だったことは間  
違いない。

だが、少女は手ぶらだ。この恐竜を燃やした火器はどこかに置いてきたのだろうか。

少女の答えは、智浩にとって意外なものだった。

「なにいつてるの。それはあなたが自分でやったのよ」

「は？」

なかばあきれたような少女の返答に、智浩の目が点になる。

「私が？私はマツチ一本持っていないぞ」

智浩は嫌煙家である。

そのことに対する少女の答えは、智浩にとって全く理解不能だった。

「道具なんか必要じゃないわ。これは魔法。本当は呪文がなければ正しく制御なんかできないんだけど、極限の危機に瀕して例外的に発動したってところかしら」

「まほう？」

智浩は少女の言葉を反芻した。

彼は魔法、という言葉は知っている。その意味も。

だが、それは彼にとって映画や、彼の息子が遊んでいるテレビゲームの中のものだ。

「私は、子供じゃない」

しばらくまばたきを繰り返した後、智浩が口にしたのはそんな言葉だった。

「見ればわかるわ」少女は素っ気なく言ったあと、ため息をついた。

「私も、大人の人を召喚するのは初めてだけど」

「しょうかん？」

智浩はまた抑揚なく繰り返した。少女の言葉についていけない。

「そうよ」

少女はうなずいた。それから大きく腕を広げて、言った。

「ここは、あなたの住んでいたのとは異なる世界。あなたはわたしに、この世界へと召喚されたの」

「召喚？」また繰り返した。「何のために？」

少女は智浩の目を真正面からのぞき込んだ。その目は真剣そのものだった。

「勇者として、この世界を救ってもらうために」

## (1) (後書き)

お読みいただきありがとうございます。

この作品については、あまり書き溜めをしていないので更新はゆっくりになると思います。

続きを気にしてくださる方は、どうぞ気長にお待ちください。

ご感想、ご意見など、いつでもお待ちしております。

(2)

智浩は、ともかく近くの街に案内するという少女の言葉に従って、彼女の後ろをついて森を進んでいた。

彼女の語る、魔法だの召喚だの、さらには勇者だの世界をすくうだのという言葉の数々について、智浩はまったく実感をもてなかった。少女についていくことに、不安がなかったわけではない。

だが、いま彼が置かれている状況そのものが、彼にとって理解不能なのだ。彼女と別れてひとりで森をさまよって、果たして無事我が家に帰りつくことができるだろうか？ 智浩にはそうは思えなかった。

より正直にいえば、ひとりになるのは怖かったのである。

もちろん、少女についていくにあたって、そんな素振りはおくびにも出さない。君のいつていることは正直理解不能だが、とりあえず人のいるところまでは一緒に行ってもいい。とそんな態度だ。

智浩からすれば相手は自分の息子ほどの少女　歳をたずねたわけではないから、あくまで外見からの推測ではあるが　であり、自分は大人だ。まして男である。

大の大人の男性が、森の中でひとりになるのは怖いなどと、年端もいかない女性にいうわけにはいかない。本当は少女と一緒に歩いているいまも、ともすれば得体の知れない不安が背筋のあたりから上つてきそうになるのだが、智浩は腹の底にぐっと力を入れて、平然を装いつつ少女のあとをついていく。

少女の方はそんな智浩の態度をとくに気にした様子もなく先を進む。ときおり智浩がきちんとついてきているか確認するため振り返るが、ちらと確認するだけでとくになにをいうこともない。

ふたりが進んでいるのは、さきほど智浩が必死になって逃げていた細いが踏み固められた道ではなく、森の中だった。少女の案内がなければ、智浩は入ってみようとも思わなかっただろう。

一応、しばらく入ったあたりからところどころ土が露出した獣道のようにはなったが、幅は人ひとりがやっと通れる程度で、智浩からすれば歩きづらいことこの上ない。

そもそも、智浩はいま靴を履いていない。紺色のポロシャツにベージュのチノパン、それに白のソックスという、マンションの一室にいたときの格好のままだった。さきほど恐竜に追いかけられているときは必死すぎて気にする余裕もなかったし、地面が乾いていたのでそれほど走りづらいということもなかった。しかし、こうして森の中のしめって柔らかい土の上を歩くなれば、洗濯されたばかりの白のソックスはあつというまに土の色に染められて汚れてしまっているし、足下の触感がダイレクトに伝わってきて、少々気持ちが悪い。

都会暮らしが長く、歩くといえばアスファルト舗装の道の上ばかりだった智浩にはなかなかの苦行といえた。強すぎる草のにおいも智浩を辟易させる。

「おい君。なぜこんな森の中を行くんだ？ さっきの道の方が多少なりとも歩きやすそうだったと思うのだが」

ついに我慢しきれなくなり、智浩は目の前の少女に声をかけた。

少女は足を止め、振り向いた。

「こっちの方が近いし、それに、あの道に戻ると、またアーロが出るわよ」

「アーロ？」

「さっきの怪物」

少女の言葉で、眼前に迫る無数の牙の列が思い出されて、智浩は身震いした。

「すこし前からあのあたりを狩り場に行っているの。おかげで街道は使えないわ」

「そうか……」

智浩はちいさくため息をついた。それなら、我慢してこの道を行くほかはない。

「ミュールよ」

少女がそう言い、智浩は顔を上げた。

「え？」

「わたしの名前。あとでちゃんと自己紹介するけど、名前がわからないと呼びづらいわよね」

「あ、ああ」

「おじさんの名前は？」

「私は智浩。……早乙女智浩だ」

智浩は少女につられるようにしてファーストネームを答えたが、すぐに気恥ずかしさを感じてフルネームで言い直した。

「トモヒロね。もうすこしで森は抜けるから、がんばって」

少女は軽く笑みを浮かべてそういうと、また獣道を進みはじめた。

もうすこし 確かにそういつていたはずだ。

だが、智浩はその後森の中をたつぷり三十分は歩かされた。

「ほら、森が切れるわ」

進行方向から差し込む太陽の光を手でさえぎるようにしながら、

ミュールが智浩に声をかけた。

「や、やつとか……」

日頃の運動不足がたたった智浩は息が上がっていたが、ミュールの方は平然としている。

「だらしないなあ、おじさん」

そう言われても、反論のしようもなかった。

森を抜けると、一気に視界が開ける。

なだらかな下り坂がずっと先まで続いているため、かなり遠くまで見通せた。

「ほら、あそこが目的地。リボータの街よ」

ミュールが指し示す方向に、外壁に囲まれた石造りの街が一望できた。

外壁の周りには、農地が広がっているのも確認できる。

農地はある程度のところで途切れ、あとはずっと草原が広がっていた。

「ん？ ちょっと待て」

智浩は悪い予感がした。「あそこまで、歩いていくのか？」

自分たちの方が高い位置にいるとはいえ、街の全貌が視界にはいるというのは、街がかなり遠いところにあるという証拠だ。

ミユールがそれを聞いてくすぐすと笑った。それを見て、智浩は自分がよほど情けない顔をしていたことに気がつき、あわてて表情を引き締めた。

「さすがに、あそこまで歩いていたら日が暮れちゃうわ」

ミユールは笑うのを止めて、しかし笑顔のまま智浩にいった。

「馬をつないであるから。こっちょ」

「馬？」

オウム返しになった智浩の声には答えずに、ミユールはまた智浩に背をむけて歩き出す。

歩かないというから車でも停めてあるのか、と思ったら、馬？

智浩は首をかしげたが、ひよつとしたら何か別の単語を聞き間違えたのかもしれない、と思い直してとりあえずあとをついていった。

「ほら、あそこ」

しかし、いくら森沿いを進んだあと、ミユールが指し示した先には、まさに言葉どおりに馬が木につながれて草を食<sup>は</sup>んでいたのだった。

「馬？」

「？ 馬よ」

智浩がまたそうだったので、ミユールが振り返って不思議そうにこたえた。

馬の背には鞍がのせられており、ほかには荷台のようなものもない。

どうやら、本当にこの馬に乗って街まで行くようだった。

「私は、馬に乗った経験はないのだが」



「あはは、平気よ。私の後ろで座ってるだけでいいんだから」

どうやら、ミュールとふたり乗りをするというこらしい。馬は一頭しかいないので、当然といえばそうではある。

「ゲイロン、おまたせ」

ミュールは馬の方へ近づくと、その首を二度かるくたたいてやりながらそう声をかけた。それから馬をつないである木の方へ行き、縄をほどきはじめる。智浩はすこし離れた位置からその様子を眺めていた。

馬は軽く鼻を鳴らしたあと、ミュールを追うように首を巡らした。その視線が何となくミュールの短いスカートの陰にむけられているように見えて、智浩はやや面食らった。

まさか、馬だしなあ。

たまたまそう見えたただだろう、と智浩がひとりで納得しようとしていると、馬が唐突に首を戻し、こちらを見た。

あきらかに目つきが違い、こちらをにらんでいるかのようなのである。そして智浩と目が合うや、その口が動いた。

「なに見てんだ、こら」

聞こえてきたのは智浩よりもう一段低い声だった。

「……え？」

明らかにミュールの声ではないし、もちろん智浩の声でもない。

「なんか文句あるのか？」

また馬の口が動き、そこから声が聞こえてくる。

間違いなく、馬がしゃべっていた。

しかも、智浩に因縁をつけている。

「なんとかいえよ、おっさん」

そういわれても、智浩はなにも答えられない。

またしても発生した自分の常識の外にある出来事に、理解が追いつかないのだ。

馬は間違いなく馬だ。競馬場にいるようなものに比べるとやや小さめで足が太く、口バに近いようにも見えるが、すくなくともかぶ

りものや着ぐるみのたぐいではない。

それが、どういうわけか人間の言葉を発している。

ここが映画館で、スクリーン越しにこの光景を見ているのなら、智浩も戸惑うことなく受け入れたかもしれない。

だが、智浩が立っているのはいわば、スクリーンの中だ。しかも台本も役柄も知らず、カメラも監督も見あたらない。

「ちよっと、なにいきなりケンカ売ってるのよ」

そこへ、縄を解いたミュールが戻ってきて、馬に声をかけた。

「あ、ミュールう。いやー、あのおっさんがなんかじろじろ見てるからさあ」

馬はとたんに声色を変化させ、媚びを売るような甘い声を出した。「ゲイロンは紹介するまでしゃべらないで、っていつておいたでしょ。あつちの馬はしゃべらないから驚くの。コーイチのときもそうだったじゃない」

「このおっさんほどじゃなかったけどな。完璧にフリーズしてる」混乱してばかんと口を開けている智浩をしり目に、そんな会話を交わしている。

「とにかく、ゲイロンは勝手に口をきいちゃだめ。わかった？」

「はいはい」

ミュールはゲイロンをたしなめると、智浩にむきなおった。

「ごめんね、驚いたでしょ？この子はゲイロン。ちよっとスケベだけれど悪いヤツじゃないのよ」

「……」

「どうも、あなたたちの世界だと言語は人間特有の文化みたいだけど、ここではそうでもないの。まあ、そのうちなれると思うから、気にしないで」

「あなたたちの、世界……」

智浩は小さくつぶやいている。ミュールは気にせず、智浩の背後に回ってその背を押した。

「細かいことは街に着いたら説明するから。ほら、乗って」

「乗る……これにか？」

智浩はゲイロンを、得体の知れないなにかのように見た。

ゲイロンの方は、ミュールのいいつけを守ってとくになにもいわず、馬銜はみをカチャカチャ鳴らして智浩を見ている。

言葉は発していないのだが、「乗るなら早くしろ」といつているように見えて、智浩はなかなかあぶみに足をかけることができなかった。

そもそも、智浩は乗馬の経験はない。

ようやく決心してその背に乗りうとしても、最初はうまくいかず、ミュールに尻を押してもらってやっと鞍にまたがることができた。

「もうちょつと後ろに座ってくれる？ わたしが前に行くから」

そう言われて智浩が鞍の後ろまでずれると、ミュールは軽々と鞍にまたがってきた。

鞍はひとり用だったが、ミュールは身体が小さいのでふたりでも窮屈さは感じない。

「結構揺れるから、しっかりつかまっていって」

手綱を手にしたミュールが指示をする。

智浩ははじめ、鞍のふちを後ろ手につかんでいたのだが、その様子を見たミュールに「それじゃあ、危ないわ」と言われ、両手をミュールの腰に回すよう誘導されてしまった。

智浩からすると少々気恥ずかしかったのだが、いちど回した手を離すのはもつと恥ずかしいような気がしてそのままミュールの腰の前で両手をあわせた。

「じゃあゲイロン、お願い」

ミュールが声で合図をすると、ゲイロンが鼻を鳴らしてから歩き出す。

智浩は理解の追いつかない出来事はひとまず考えないことにして、自分の子供ほどの歳の少女に馬に乗せてもらい、しかもその身体につかまって運んでもらうというのはずいぶん情けない図柄だな、などと思っていた。

が、そんなことを考えていられたのはゲイロンが駆け足をは  
じめるまでの短い時間だけなのであった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7088x/>

---

オーバーエイジ・ブレイブヒーロー

2011年10月19日19時17分発行